愛知淑徳大学論集―交流文化学部篇― 第 13 号　2023.3　155-164

旅行の経験と人間形成との関係性

～アンケート調査から見えるもの～

The relationship between travel experience and character-building: What can be learned from a questionnaire

加納 和彦

Kazuhiko Kano

Abstract

There are some areas that tourism has an obvious effect on, for example economics is extremely well documented in Japan and on a global scale. How about, however, its effect on humans? There is a saying that a good child grows up through family trips.

Does an individual's experience of travel affect his or her character? What kind of travel specifically affects human nature?

This study has been done mainly by questionnaire. It has shown that travel experience has an effect on the spirits of not only children but also adults, and enlightens them.

1. はじめに

観光のもたらすものの一つに経済効果があり、現代では世界規模でその重要性が謳われている。日本も例外ではなく、観光立国を掲げているが、その主要な目的はインバウンド等による国内の経済効果であると言ってよい。観光による地域活性化も期待されるが、これも結局は地域の経済に結びつく。では経済以外に観光がもたらす効果には何があるか。国内外間を問わず訪れる人とそれを受け入れる土地の人との交流も大きな効果として期待される。それでは複数の人間による交流ではなく、観光あるいは旅行がそれをする一人の人間に及ぼす影響はどうであろうか。観光による健康効果も考えられるが、肉体的なものでなく精神的な影響はどうか。

『家族旅行でいい子が育つ』という講演記録[1]がある。この講演では家族旅行の効果として、「コミュニケーション力と社会性を高める」、「思いやりと精神的安定性を育てる」、「子供の性格形成に大きな影響力」を挙げている。これは旅行という経験がそれを行った人間のその後の内面性においてプラスに作用する効果があるということを言い表している。旅行経験がその人の成長あるいは人間形成というか人格形成に関わっているというのは興味を抱かせる。この主張はインターネット・アンケート調査の結果によるものであるが、その調査は選択式アンケートによって行われている。この主張が正しいとするならば、旅行のなかの具体的にどのような

行動あるいはどのような行為が人間性のプラスに作用するのかに興味が湧く。また成長期の子供だけでなく、成人した大人にも作用するのかどうかにも関心が生じる。

そこで選択式ではない記述式で、家族旅行に限定せず、アンケートを行って調査することにした。本研究を、旅行の経験がその一個人にもたらすものを体系的に考察する端緒としたい。

2. 先行研究

先述の『家族旅行でいい子が育つ』という講演は、森下（2011）[2]に先立つものである。この研究は、「家族旅行の回数と、調査対象者が自覚する自身の志向・性格との関連性」の調査によっている。

この調査では、「自覚する志向や性格」を調査者があらかじめ設定しており、以下の20項目が列挙されている。

Q 1　我慢強い
Q 2　人に対して思いやりがある
Q 3　行動するときは自主的に動くことが多い
Q 4　知らない人と接するのが得意
Q 5　環境が変わってもすぐに適応できる
Q 6　人と協調して行動するのが得意
Q 7　社会のさまざまな出来事に関心がある
Q 8　環境問題に興味がある
Q 9　日本の地理や歴史、情勢に興味がある
Q10　世界の地理や歴史、情勢に興味がある
Q11　将来、とてもやりたいと思う職業（やりたいこと）がある
Q12　家族が一番大切だと思う
Q13　自分は家族に大切にされていると思う
Q14　家族と普段あった出来事をよく話す
Q15　友人は多い方だ
Q16　心から信頼できる人がいる
Q17　想定外の出来事でも対処できる
Q18　物事は最後までやり遂げる
Q19　うまく行かないことでも人のせいにしない
Q20　イライラすることはあまりない

以上の20項目をさらに5つの資質に分類している。資質と項目との関係は以下の通りである。

⑴　適応力	Q 4　Q 5　Q 6　Q17
⑵　自主性	Q 1　Q 3　Q11　Q18
⑶　コミュニケーション力	Q 6　Q14　Q15　Q16　Q19
⑷　向社会性・社会性	Q 7　Q 8　Q 9　Q10　Q11　Q17　Q18
⑸　思いやり・精神の安定性	Q 1　Q 2　Q12　Q13　Q16　Q19　Q20

「家族旅行でいい子が育つ」は研究による講演の誌上採録の見出しであるが、誌上採録にも研究にも「いい子」とはどんな子なのかは述べられていない。森下（2011）では、「調査結果から、家族旅行の経験回数や海外家族旅行経験の有無と自覚する志向や性格との間に、家族旅行経験が多い層で満足度が高く、家族旅行経験の少ない層では満足度が低いとの関連性を指摘することが出来よう」と結んでいる。それに加え、講演では、「家族旅行の経験は、家族関係に大きな影響を及ぼしている」ことを述べている。すなわち、「家族旅行経験の多い層は家族関係も良好だ」と指摘しているのだが、「もともと家族関係が良好だから家族旅行に出かけるのだ」と説明されれば、それを否定することはできないとも述べている。

3. 人間形成

「いい子が育つ」というのを本研究では人間形成という言葉で言い表されるものの一部、あるいはそれに関連するものとして扱う。

「いい子が育つ」というのは、個人としての人間の成長のことを言っているのであろう。体格や身体能力などの外面的なことでなく、内面的なことが、好ましいと思われる状態になる、あるいは好ましいと思われる内面性を身に付けることを意味するのであろう。

では内面的なこととは何か。精神や頭脳のことか。辞書[3]では精神の例として根気や気力が、頭脳の例では識別力や判断力が挙げられている。ある経験を重ねることによって、根気や気力、識別力、判断力を養う、身に付けることは十分考えられる。森下（2011）では、性格と資質という言葉を用いている。根気や気力、識別力、判断力は優れたものとして認められる。それに対して性格や資質は必ずしも優れているものとは言えない。それに生まれつき備わったものと、経験や学習によってあるいは環境によって得られるものとがある。

人間形成を「社会的に大人になることまたはその過程」と捉える場合、何を身に付けたら大人になったと言えるのか、あるいは大人になるための必須条件というものがあるのだろうか。学校や学習塾以外に子供に習い事をさせることが一般化している。ピアノ、習字、そろばん、水泳、体操等々、最近ではプログラミングと多種多様にある。これらはどちらかと言えば、スキルを身につけるものであり、それが大人になるための必須条件ではない。しかしこれらを習うなかで忍耐力がついたり、コミュニケーション力がついたりすることはあるだろう。そうであっても忍耐力、コミュニケーション力が大人になるための必須条件とは言い難い。ただし、スキルや、忍耐力やコミュニケーション力のような人間力が備わっていると、豊かな人生を送ることができるという想像はできる。

「いい子が育つ」を人間形成と関連して考えようとしたが、人間に優劣があるのかないのか、あるいは豊かな人生とそうでない人生ということにまで及ぶので、このことについてはここまでとし、何がその人間の内面性に単純に良い意味で影響を及ぼすのかをあらためて考えてみたい。

『性格を表す言葉 100 種類』[4]というものがある。大まかな内容は次のとおりである。

長所に使われる性格一覧

1. 好奇心旺盛　2. 謙虚　3. 人懐っこい　4. 感性豊か　5. 機転がきく
6. 思いやりがある　7. 感受性が強い　8. 感情表現豊か……計55個

短所に使われる性格一覧

1. 心配性　2. 優柔不断　3. 臆病　4. 傲慢　5. 意地っ張り　6. 厚かましい　7. 人見知り　8. 緊張しやすい　9. 短気……計38個

長所にも短所にも使われる性格一覧

1. 慎重　2. マイペース　3. 頑固　4. おせっかい　5. 繊細……計7個

上記についてまず、性格を表す言葉として正しいかどうか不明であることが挙げられる。また性格というものは捉えようによって長所でもあり、短所でもあるということである。昨今の就職活動で必要とされていると言われるコミュニケーション能力は、性格と言えるのか。上記の一覧には省略したが、長所に使われる性格一覧の中に、「コミュ力が高い」というのがある。明確に性格と言えるかどうかは疑問の余地があるが、諸々の性格が関係しているのも確かなように思える。

性格であるかないかより、社会で生きていくためにより良いと思われる内面性は生まれつきのものなのか、成長の過程で身につくものなのか、さらに自然に身につくものなのか、または意識や訓練によって身につくのかが問題である。それは本研究のテーマである旅行の経験によって何かが身に付くかどうかということである。

これは生まれつきのもの、すなわち先天的なものと、後天的なものとが合わさってのことだろう。後天的なものは環境によるものであり、その環境は意図的にも作られる。意図的にとは訓練もその中にある。そしてその環境はさまざまなものが絡み合ってできたものではないか。その環境の一つが旅行という経験であるかどうかということである。

日本には教育の一環として、修学旅行というものがある。小中高生という成長期にある者に旅行を通して教育をしようというものである。そこには明確な目的がある。1988年に文部科学省から出された修学旅行の目的の要約は次のとおりである。

「知識を広げる」

「集団生活のきまりを守れるようになる」

「社会に生きる一人として守るべきルールを身につける」[5]

この中の「知識を広げる」は、歴史学習や地理学習、社会学習のことを言っているのだが、他の2点は「大人になる」という学びあるいは訓練と言えるのではないか。旅行に「大人になる」という明確な目標を持つのも珍しい。ただし、目標はなくても、結果的に得られる、身につくということもあるはずである。そのことを探るためにアンケート調査を行った。

人間形成は成長しても、大人になっても続くものではないか。そう考えれば、いくつになっても、人は変わり得る、しかも良い方向に変わることが可能であるはずだ。そうであれば、成長期の子供に旅行の経験が影響を及ぼすなら、すでに成長した大人に、大人になってからの旅行の経験がその後に影響しても不思議ではない。ということで次のアンケート調査では大人も対象とした。

4. アンケート調査

森下（2011）は、18 歳～25 歳を対象に選択式でアンケート調査を行った。しかし本研究は、旅行という行動のなかの具体的にどのような行為がそれを行う人間の内面性に好ましく影響するのかを探るため、選択式ではなく記述式のアンケートを、しかも年齢層の幅を広げて行うこととした。

調査は筆者が教員として勤務する大学の担当する授業の中で、履修学生に対して行った[6]。授業クラスは履修者数が 99 名と 65 名からなる 2 クラスで、授業科目名は異なるが、両クラスとも観光関連の授業である。さらに履修学生にアンケート用紙を持ち帰らせ、それらの家族等にもアンケートに協力してもらうよう依頼した。

授業内の学生に対しては、罫線の入った白紙の A4 サイズ用紙を配布し、資料 1 のアンケート用紙の文面をパワーポイントのスライドで提示し、口頭による説明を加えて、記述させた。持ち帰らせたものは、同じく A4 サイズ用紙で、片面は資料 1 のアンケート依頼文面、もう片面は罫線の入った白紙である。

資料１　アンケート用紙

アンケート　聞き取り調査

これまでの自身の旅行の経験で、現在の自分に精神面でプラスに影響していると思われる出来事を教えてください。

旅行とは、計画・準備段階も含めます。
旅行の経験は、ある 1 回の旅行でも複数回通しての旅行でも、どちらでも構いません。
精神面とは、ここでは性格や人間的スキルを指し、また感情も含めます。その他、生き方や考え方、職業の選択についてでもいいです。体力や健康面以外でその後の自分にプラスに働いた出来事を、あれば教えてください。

現在のあなたの年齢と性別も書いてください。
その出来事のあった旅行をした時のあなたの年齢（書き方の例：小学校入学前・小学生・中学生・高校生・大学生・20 代・30 代……）

例
小学生の頃、よく家族旅行に連れていってもらい、自分は家族に大切にされていると感じた。
今、自分が精神的に穏やかなのは、小学生の頃によく家族旅行をしたからではないかと思う。
高校生の時、一人で“青春 18 きっぷ”を使って旅行して、その時から気軽に人と話すことができるようになった。
高校の時、沖縄へ修学旅行に行って、悲惨なことがあったのだと思って、将来は世界の平和に役立つことをしたいと思うようになった。
大学生になって、友だち同士で旅行する時、計画するのが楽しくて、完璧な内容にしようと毎回務めている。

聞き取り調査
父母、祖父母、兄弟姉妹誰でも何人でも、いくつでもいいです。

アンケート回収数は次の通りである。

履修学生	
1 年生	79（10:69）
2 年生	54（ 4:50）
3 年生	21（ 3:18）
4 年生	3（ 1: 2）
計	157（18:139）

その他（履修学生の家族等々）			
小学生	2（ 1: 1）	20 歳代	13（ 2:11）
中学生	1（ 1: 0）	30 歳代	2（ 1: 1）
高校生	4（ 2: 2）	40 歳代	46（10:36）
大学生	15（ 2:13）	50 歳代	34（11:23）
		60 歳代	3（ 1: 2）
		70 歳代	2（ 1: 1）
計			122（32:90）

総合計 279[7]（50:229）　※（　　）内は左：男性、右：女性

回答の記述はまったく自由であるため、書き方は十人十色である。1 点ずつ読み、それぞれの要点をデータ入力し、読み返した。この作業で気づく特筆すべきワードは、旅行形態として「家族旅行」と「海外旅行」である。旅行形態の他には、「計画」という語が多く目に留まった。

この研究はもともと、「成長期の家族旅行の経験がどのように子供に影響するか」というところから始まっているが、旅行の経験が及ぼすのは「子供に限らない」という推察から、アンケート実施前の説明では「家族旅行」という語の使用を控えるようにしたが、学生たちにとっては旅行の経験と言えば、「家族旅行」となるのが多いようである。しかも学生たちの親世代にとっても「家族旅行」は、自分自身が子供であった頃も、今、自身が子供を持つ親の立場であっても、旅行形態として大きな比重を占めるようだ。

また「計画」というワードについては、「自分で計画した」、「友人と計画した」、「計画に苦労した」、「計画どおりできた」、「計画するのが楽しかった」等々、「計画」をキーワードとして旅行の経験を述べているのが印象に残った。そこには学生であるから旅行会社の出来合いのパッケージ旅行よりも自分たちのしたいことだけをする、また費用のことも考えてオリジナルな旅行をしているのかという考えにも至った。

279 点の回答の中から象徴的と思われる 4 点を以下に掲載する。すべて原文のままで、3 点目と 4 点目は一人の学生の父母である。

◎40 代／女性／母

小学生の時は、家族旅行にたくさん連れて行ってもらったので、自分が家庭を築き子どもが産まれたら、子どもたちにも良い経験をしてもらうために旅行に連れて行こうと思った。

高校時代では、友達と“青春 18 きっぷ”を使って、自分で旅行の計画をたてることになり、計画することの楽しさを知った。

大学時代は、バックパッカーで世界旅行をし、原地の人とふれあい、様々な文化を知ったことで、日本のあたり前があたり前じゃないと知り、視野が広がった。国内で東北地方を旅した時は、泊まった宿の無償の優しさに触れて、自分もそんな人になりたいと思った。

20 代、務めてから同期の子たち 8 人で北陸を旅した。8 人と人数が多かったが、みんなが楽しく過ごせるように各自がすすんで役割り分担をし、協調性の大切さを強く感じた。

◎52 歳／女性／母

私が短期大学 1 年の時、ヨーロッパへ幼児教育の研修旅行へ行き、世界にはこんなにすばらしい場所があるんだと感じたこと。そして改めて日本のよさにも気付くことが出来たことが、自分にとって、とてもプラスとなった旅でした。

また、日頃から厳しい父でしたが、このヨーロッパ研修のチラシを家に持ち帰り、行けないだろうと思っていた私に、見せたと同時に「行ってこい」と言ってくれた事に驚き、厳しく怖い父でしたが、私のことを思ってくれていると感じ、ここから父との良好な関係が築かれていったように思います。

この初めてのこの海外でのすばらしい経験が、私の人生において、心を豊かにし、今の価値観に影響を与えたことに間違いないと思っています。

◎53 歳／男性

高校生の夏休み、友人と上高地へ自転車の旅をしました。

当時、不良学校に通っていた私は、自然に触れ、いやされたいと思っていましたが、予想以上に体力面精神面共に厳しい道中で友人と励まし合ったり、地元の人、同じように旅をしているバイカーに励まされて、目的の上高地に着くことが出来ました。

上高地では、壮大な自然に触れ、自炊したり、野宿やテントで寝泊まりしたりして、生きることの大変さ、大切さを知りました。

元々、絵を描くことが好きでしたが、旅で見た風景や季節感をお皿に表現して、食してくれる人の心に寄りたいと思い料理人になりました。

◎47歳／女性

20代前半、イギリスに留学していた私は、スペイン、ギリシア、イタリアを旅しました。現地の人はとても優しく接してくれてホテル業界で働きたいと思っていた私は、人と人とのつながりは、心を温かく穏やかにしてくれると確信しました。

帰国して、外資系ホテルに就職し、お客様と接する中で思い悩むこともありましたが、当時のことを思い出し、前向きな気持ちで接客に臨むよう心がけました。

アンケート回収279点がすべて、上記のような書き方がしてあるわけではなく、要点のみ簡略して記述しているものも多いが、ほとんどすべての回答者が旅行経験によって、大なり小なりの影響があったことを述べている。上記4点をここに挙げたのは、学生たちよりもその親世代のほうが旅行経験による自身へのその後の影響をより重く感じ取っているように思われることを示すためである。

5. 人格形成以外のもの

旅行の経験がその人間にどのような影響を及ぼすかということを考えるならば、その旅行で人は何をしているのかも明らかにしておかなければならない。そこで、旅行という行為あるいは行動における具体的なものは何か、どんな行為・行動から旅行が成り立つのか、またそれらによってどんなことが起こり得るのかを整理しておく。

- 旅行の仕方や旅先に関する知識や情報の有無あるいはその量の違い
- 見慣れた風景や日常の環境と異なる状況に身を置く
- 新しいものの発見や初めての体験
- 旅行中に関わる初めての人々
- 一人でない場合の同行者との関わり

以上のことは次の心理状態を表す言葉で表現できるのではないか。すなわち、不安、緊張感、恐怖、開放感、楽しさ・喜びなどである。さらに心理状態をプラスとマイナスに分けた時、人間の成長にとっては、マイナスである困難な状況を乗り切った時に好結果をもたらすのではないか。もちろん楽しさや喜びという心理状態や感情もものを大切にしたり、愛したりということにつながる。

旅行の経験を通して得られる現象や能力を以下のように表してみた。

計画、トラブル回避／打開、出会い・発見、コミュニケーション力、啓発
トラブル回避またはトラブルからの脱出のための手立て

これらのことは旅行という経験でしか得られないものではないことはもちろんである。しか

しながらここで強調したいのは、旅行という中でこれらのことが凝縮して経験できるということである。しかも、その旅行に主体的に参加するほどその機会が多い。

コミュニケーション力　コミュニケーションは旅行中に言葉を交わしたりして接するすべての人と同行者との間で行われるものである。一人での旅行は上記のものをすべて、自分一人が負うことになる。同行者がいる場合は、上記のことに関わる程度が自身によって異なり、不安や恐怖の程度、またトラブル回避／打開の度合いが低い旅行者もいる。旅行への関わり度合いによるが、旅行経験が豊富になるほどコミュニケーション力が増すのは確かではないか。

計画　人間はものを作る、組み立て仕上げることに楽しみや喜びを感じるものである。旅行は無形と言えるが、机上で計画し、作り上げ、それを実際に体験していくものである。形のあるものを作り上げると同じようにあるいはそれ以上に楽しみや喜びを感じられるものではないのか。この計画という行為によって生じる楽しみや工夫する心は、旅行のなかの大きな要素であることは間違いないと思われる。

家族旅行　家族旅行の頻度が高いほど、その子どもの家族に対する愛情が高まることは間違いないことだと言える。しかし、子どもがその旅行にどのように関わるか、さらに言えば、自身の意思の有無に関わらず、積極的に関わるかによって、家族に対する思いや、前述した諸々の能力を身に付けられるかどうかは大いに異なる。

家族揃っての行動は旅行以外にもいくらでもあり得る。しかし旅行が日常から非日常へということで考えれば、家族旅行は家族が揃って日常から非日常へ入るということでは特殊である。

啓発　「いい子に育つ」あるいは人間形成というよりも、その人間のその後の生き方に大いに影響することがあり得る。世界の貧困を考えたり、何かの勉強を始めるきっかけになったり、あるいは将来の仕事のヒントになったりと、さまざまな啓発がある。

6. おわりに

観光を楽しみのための旅行として捉えるとき、それは余暇活動の一つ、すなわちレジャーであり、一個人の人間にとって必要不可欠のものとは言い難い。癒しのためとか、親睦を図る、体験や探究を目的とすることはあっても、人間の成長のためとか、精神の向上を目的として旅行をする人はいないであろう。しかし、楽しみのための旅行であっても、意図せずに大きなもの、多くのものが得られるのが、旅行ではないのかというのが、ここで強調したいことである。観光、旅行あるいは旅のもつ効力、その中でも特に人間に対してもつ効力にもっと焦点が当てられてもよいのではないか。

前述の精神の向上を目的として旅行をすることはないと述べたが、この言説は正確ではない。例えば四国遍路をする人には、それに類似した目的があるからである。修学旅行が日本の学校教育の中で目的を定めた旅行であるように、成長期の子供に、今度は学校とは離れたところで教育や精神性を求める旅行の体験を勧めることを最後に提言したい。

今回のアンケート調査によって、特に親世代の回答からわかったのは、成長期の人間形成よ

りも、年齢に関わらずその時その時の旅行の経緯により、さらに見聞を広めたり、深く物事を考えたりすることがあり得るということである。

謝　辞

本研究実践にあたり、アンケートにご協力いただいた愛知淑徳大学交流文化学部の「観光産業 1（観光マネジメント）」並びに「観光産業 3（ツーリズム論）」履修の学生の皆さん及びそのご家族、友人・知人の皆さまに感謝申し上げます。真摯にご回答いただき、多くの貴重な資料が集まり、本研究に大いに反映させることができました。お礼申し上げます。

注

[1] TRAVEL JOURNAL 2010.7.12 pp.18-20.　誌上採録「家族旅行でいい子が育つ　TJ 通常総会特別講演から 森下晶美氏」

[2] 森下晶美（2011）「成長期の家族旅行経験と個人の志向・性格との関連性について」『観光学研究』第 10 号 pp.95-111. 東洋大学

[3] 『広辞苑』

[4] 「性格を表す言葉 100 種類 性格一覧で自分の長所と短所」WEB 雑誌 ヒトノトモシ https://www.mypsychology.biz/seikakuarawasukotoba/ (2022.12.15 閲覧）

[5] 「修学旅行へ行く目的を文部科学省の告示をもとに解説」https://bus-depot.in/tokusyu/column-student-trip/ 2022.8.20 閲覧）

[6] 2022 年 9 月 26 日と 9 月 27 日の授業内にて実施。履修学生の家族等のアンケートは授業日の 1〜2 週間後に回収。

[7] その他内容不明の回答 18 点あり。